

# 子供のための授業づくり

## 好循環を生み出す40分授業

奈須正裕・上智大学総合人間科学部教育学学科教授

第41回

授業の1単位時間について、小学校学習指導要領総則には「各教科等のそれぞれの授業の1単位時間は、各学校において、各教科等の年間授業時数を確保しつつ、児童の発達の段階及び各教科等や学習活動の特質を考慮して適切に定める」と記されている。注目してほしいのは、45分という表現が見当たらないことである。

1989年版の学習指導要領には「各教科等のそれぞれの授業の1単位時間は、45分を常例とし、学校や児童の実態に即して適切に定めるものとする。なお、各教科等の特質に応じ、指導方法の工夫によって教育効果を高めることができる場合には、各教科等の年間授業時数を確保しつつ、適切な計画の下に授業の1単位時間を弾力的に運用することができる」と記されている。

この「45分を常例とする」との記述が、長年にわたり、小学校の授業の1単位時間を45分とするこの法令上の根拠となっていた。この段階でも、既に「授業の1単位時間を弾力的に運用すること」は認められていたが、それは「45分を常例」とした上でのことであった。

しかし、98年版の学習指導要領で現行と同様の

り出せるようにする。もちろん、チャイムは鳴らさない。いわゆるノーチャイム制を取り、子供たちは常に時計を見て動く。

一方、取り組みが多いのは、やはり40分授業である。実践校で聞いてみると、要は慣れだと言う。ある教師は「以前は明確な意識なく45分という枠で授業をしていたから、結果的に45分を漫然と使っていたこともあったように思う」と、かつての自身を振り返って語ってくれた。

実際、授業を参観していると、この内容であれば、上手に進めれば45分もかからないと感じる授業に出会うことはある。典型は導入であり、導入に5分から時には10分もかける授業を見るにつけ、その思いは強くなる。また、だからこそ、子供の集中も続かないのかもしれない。

授業の名人と呼ばれる人は、さつと本題に入る。そして、通常の授業の進度までは30分から35分程度で到達し、さらにもう一段階、学びを深めたり広げたりする。

授業の1単位時間を短くする際、悩ましいのは実技系教科で、例えば体育は準備と片付けに一定の時間を要するから、どうしても実質的な活動や学びの時間が圧迫される。これについては、同じ学年の授業を2クラス連続で行うよう時間割を工夫することで、1時間目のクラスは準備だけ、2時間目のクラスは片付けだけにするなどの工夫がなされてきた。このような工夫をさまざまに施すことで、従来45分で展開している授業の多くを、40分で実施することができる。

記述になり、今日に至っている。つまり、既に20年以上前から、授業の1単位時間は45分とは特に定められてはいない。

45分という表現が残っているのは、学校教育法施行規則第51条別表第1である。ここに定められた授業時数、例えば小学校第6学年の総授業時数が1015時数であるとか、さらに、理科の授業時数が105時数であるとかいう際の1単位時間の長さは、今もなお45分である。

しかし、これは各学校で授業を計画、実施する際に、1単位時間を45分にすることを求めているわけではない。年間に実施すべき授業の時間的長さについて、小学校6年生では45分×1015＝4万5675分、そのうち理科を45分×105＝4万725分実施するよう定めているのである。文部科学省の総則解説にもあるように「総則でいう『年間授業時数を確保しつつ』という意味は、あくまでも授業時数の1単位時間を45分として計算した学校教育法施行規則第51条別表第1に定める授業時数を確保するという意味であることに留意する必要がある」(62頁)。

この事を踏まえた上で「具体的な授業の1単位

こう書く「わずから5分の時短がそんなに重要か」と叱られそうだが、私たちが教育という営みを展開している時間という資源は、もともと子供が所有するものであり、私たちはそれを預かっている、もつと言えど奪っているのである。

子供からすれば、掛け替えのない時間を大人に預けているわけで、それを使つてあれこれ教えてくれるのは、まあ百歩譲つてありがたいと殊勝にも考えてくれたらしよう。しかし、せめてものこととして、その貴重な時間をできるだけ大切に使用して教えてほしいと願うのではないか。

そう考えれば、5分といえども大切に扱わねばならない。40分授業への挑戦は、子供に誠意を尽くそうとした結果たどり着いた、可能な選択肢の一つとも言えるように思う。

### 好循環を生み出すシステム

先述のように、授業の1単位時間を40分にした場合には、回数を増やす必要がある。しかし、もし従来45分で実施してきた授業と同質の学びを40分で提供できるのであれば、学力保障の点からも、回数を特に増やさなくてもよいのではないか。この大胆な仮説に挑戦しているのが、東京都目黒区である。そのために、授業時数も含め、学習指導要領の制約を離れて実践開発ができる研究開発学校の指定を取り、各学校が創意に満ちた多様な取り組みを進めている。

目黒区では、既に長年の取り組みの中で、40分授業でも十分に学力保障が可能であることを確認

時間は、指導内容のまとまりや学習活動の内容を考慮して教育効果を高める観点に立って、教育的な配慮に基づき定められなければならない」(62頁63頁)とある。すると、1単位時間は40分でも60分でも構わないし、さらに、さまざまな長さの時間を組み合わせてよい。

ただ、その場合にも、例えば40分にするのであれば、別表第1の年間1015時数は4万5675分を意味するから、これを40分で割つた回数、約1142回の授業実施を要することになる。1割以上増えるわけで大変ではあるが、その分、さまざまな試みが可能にはなってくるだろう。逆に、高校では以前から60分授業の取り組みもある。長い時間の中でじっくりと学びを深めることを意図したものであり、その場合は回数が大きく減るが、それを補つて余りあるメリットがあると判断するからこそ、挑戦してきたに違いない。

このように、年間に実施する時間の総量が確保できれば、1単位時間をどんな長さで実施するかは、基本的に現場の裁量なのである。

### 子供から預かっている時間

授業の1単位時間に関する実践的な工夫は、過去にもさまざまに取り組まれてきた。

柔軟性の拡大という意味で、最も徹底しているのはモジュール・スケジュールであろう。例えば15分を基本の時間の長さ、1モジュールとして設定し、二つで30分、三つで45分、四つで60分といった具合に、さまざまな長さの授業を自在につく

してきた。そこで今回の研究開発では、別表第1に示された授業時数II回数のまま、40分授業を実施している。その結果、毎時間5分の短縮となり、これが年間にすると4年生以上で5分×1015の5075分、何と約85時間の時間的余裕が生み出されることになる。

では、もたらされた貴重な余白は、何に使うのか。子供から預かっている時間から生まれた余白なのだから、子供に返すのが自然だが、目黒区教委の取り組みが斬新なのは、半分程度を教師に返している点である。

授業の質は、教科の内容や系統の研究、教材の研究や開発、学習環境の整備などに大きく依存する。40分で45分と同程度かそれ以上の質の授業を実施するには、ここにこそ注力したい。そのための時間に充当しているのである。年間85時間の半分という42から43時間になるが、これが学校に子供が来ている年間の週数と一致する。つまり、毎週60分程度、勤務時間内に授業の計画や準備の時間が確保できる。働き方改革の観点からも、その意義は大きい。

45分で実施してきた授業を40分にする、内容が薄まり、深まりに欠けるのではないかと心配する声があるが、しっかりと準備をすることで5分の短縮分を補えることを、目黒区の取り組みは示唆している。注目すべきは、これを短縮から生まれた5分の効果的な利用によって実現している点であろう。まさに好循環を生み出す新たなシステムの提起であり、大いに学びたい。